

藏 俊 と 貞 慶

富 貴 原 章 信

藏 俊

覺晴の弟子であつて、唯識宗の復興にあたり不朽の功績をのこした人に藏俊がある。藏俊は本朝高僧傳によれば、北京貴種よりいふるといふが、興福寺別當次第には權別當權少僧都藏俊の下に、凡人、贈僧正、俗姓縣中、大和國人也と細註し、こゝに俗姓は縣中氏とあるが、さらにその經歷を記す中に、巨勢氏、大和國高市郡池尻村茅屋之子なりとも記すのである。果して、何れが正しいか、さらに後考をまつ。父母は子がないことを憂へ、春日社に祈請するに夢の告あり、乃ち娠み生じたといふのである。幼にして寺にいら、夜を日について修學し、さらに撓むところがなかつた。良慶、定清、長有などの門をたづね、また覺晴に師事して唯識の祕奥をさぐり、二

明の才は時輩に軼ふとある。もつて藏俊はいかに恪勤精勵の人であつたか知ることができよう。

仁安三年、六十五といふ老齡になつてから講師をつとめた。當時、藏俊の他に六十を越えてから、漸く講師をつとめた人もないではないが、しかしまた一方では、すでに二十有餘にして、その出身が名門貴顯であるために、もはや講師をつとめるやうな人もあつた。こゝに平安末期の紊亂した世相が明かに反映してゐる。すでに教學の權威は地に墜ちてゐたのであるが、この地におちた教學を復興して、前の大成時代の唯識宗に比較し、決して劣らないほどに盛大なものとした最初の人が即ち藏俊である。七十餘年の全生涯を教學復興のためにさゝげてきた藏俊には、名譽を求め權門に阿ねるといふことなど、一顧の價値さへなかつたらう。さればこそ六十五歳の老年

となつて、當時、無雙の碩學が初めて講師をつとめたのである。

安元二年に權律師となり、また同年には三會の探題となつたが、しかしこの探題が大乗院より出立のときには僧綱以下、衆僧が扈從、藏俊依學の信圓僧都(大乘院門跡)もまた師資の禮をもつて威儀を嚴つたといふ。こゝに藏俊は學徳兼備の高僧なりしことが充分に知られる。治承元年に元興寺の別當、治承二年に權少僧都に轉じ、同四年に七十七をもつて入滅した。してみると藏俊は一一〇三——一一八〇の人で、覺晴より十四の年少なることが知られる。なほ本朝高僧傳によれば、平清盛は藏俊の高徳を崇めその入滅を惜しみ、奏して僧正を贈つたといふ(建保二年)。また藏俊は菩提院に住したので、同學抄などには菩提院贈僧正といふのである。

次に藏俊の著作について記せば、唯識論本文抄四十五卷は僧正の作であらうと見られる。およそこの本文抄は唯識本論を中心として、唯識教學における重要な問題を一々指摘し、これに必要な資料を克明に蒐集して筆録したものである。例へば眞如所緣緣(本文抄第九、大正六五、四八〇)の問題について、

問 決擇分中、諸出世間法從眞如所緣緣種子生云云等

者、說淨法因緣歟、將說所緣緣歟。

(答) 兩方。

問 兩者以眞如實爲淨法因緣歟。

といふ問を起し、これに答へてまづ本論(新導本二、一七)の文をひき、

論云、有義種子皆熏習故生乃至是出世心種子生故云云

と記し、次にこの文を釋する唯識述記の文をあげ、

疏云、攝論第三卷出世淨章中略又瑜伽論五十二說、

從眞如所緣緣種子生、與此文同云云

といひ、こゝに瑜伽の眞如所緣緣種子が問題となることを記すのである。次にこの瑜伽論の文に對する唯識演

秘の釋をひき、

秘云、疏五十二眞如所緣緣種子生者乃至更有同異具如

彼抄云云

と記し、次に

肝心云、又五十二說○者乃至亦同此說云云

の文をひく。こゝに肝心とは善珠の唯識論肝心記の文であらう。次に瑜伽五十二の文をつぶさにひき、

瑜伽論五十二攝決擇分云中略是故無過云云

といひ、さらにこの文に對する慈恩の瑜伽略纂の釋を

ひき、

ひき、

同抄十三云、中略眞如所縁縁種子云

と記し、次に餘師抄可勘合之といふ一句がある。これは瑜伽の註疏には慈恩抄の他になほ諸師の註があるからまたこれを参照せよといふのである。次に眞如所縁縁を考へるについて、看過されない書に淄州の慧日論がある。故にこの書の文を二つ引いて、

慧日論第二云乃至如前已辨云

同第四云中略能生有體文

と記し、終りに、

攝論神泰疏第四、(神)廓疏第四、並(德二)中邊義鏡章第四(三イ)、(義林章)總料簡、八卷私記第七等、具可勘合とむすぶ。この八卷私記といふは、誰の作であるか解らない。しかしそれは兎に角、本文抄はこのやうな體裁をもつて、唯識論の第一卷より第十卷にわたり、その問題となるところを一々指摘し、そしてこれに必要な參考書の文を克明に記すのである。こゝに注目すべきことはこれらの引文に對して筆者の解釋、もしくは決擇が些かも加へられぬことである。これは前の大成時代に著はされた諸師の著作、または後に作られ尋思抄、同學抄などに比較して顯著なる相違である。

また本文抄において見逃されないことは、前記の攝論

神泰疏、同神廓疏、中邊義鏡、肝心記など現今では殆んど散じて見る事ができないやうな幾多の書の本文が、可なり長く引用されることである。この點、洵に今日では得がたき資料を提供する斯學の寶庫とみられるが、さらにこの寶庫なる點において、恐らくこの書は治承の兵亂、即ち平重衡が興福東大の二大寺を燒きはらひ、殆んど烏有に歸せしめた以前において、制作されたものであらうと考へられる。それでは誰の作かといふに、これは何も本文抄には記されぬから不明であるが、およそこの本文抄の體裁は因明大疏抄に類似し、そしてその大疏抄は藏俊の作であるから、やはりこの本文抄もまた著者が同じであらうと見られる。藏俊の入滅は治承の兵亂の起つた年にあたるのである。

それではこの本文抄や大疏抄のやうに、一の問題をかゝげ、これに必要な經文、論文、疏文などを網羅して引くだけで、これに對する著者の意見、乃至は決擇があたえられぬやうな著作態度はどうかというに、これにはまづ藏俊が在世した時代の時代的背景から考へなくてはならない。すでに時は平安の末期である。鬪諍堅固の世相は人心を極度の不安におとし入れた。生命の危険さへ身近にせまる恐慌は容易に終熄すべくもなかつた。人生の

一大事をおしへ、生涯を全くするために不可缺の信念をあたへ、もつて人心を安心立命の天地に導くべき佛教の寺院において、殆んどこれを實行しないばかりではなく、かへつてそこは權勢の魔窟と化し、また暴徒の巢窟と變つてゐた。

尤もこのやうな時代において、人生を全くし、永遠の生命を求める人が一人もないではなかつた。これら眞摯な求道者の中には、魔窟と化した寺院に別れて、山林にすみ田園にかくれ、晴耕雨讀、白雲を友として隱遁生活をいとなむ人もあつたが、またこのやうな寺院にふみ止まつて、すでに斜陽の觀を呈する教學を、何とかして復興し、さらにこれを永遠に傳へようと努力した人もあつた。思ふに藏俊はこの後者に屬する人であらう。それに嘗つては南都の佛教に對抗し、新興の意氣めざましく興つてきた叡山の佛教も、いまや數百年の傳統を生じて、弊害を續出し、この點、全く南都の佛教に變るところはなかつた。教學の權威は地をはらひ、教團の衰微は覆ふべくもなかつたのである。

心靈の飢渴にせまられ、永劫の問題になやむ人に、生命の枯渴した祈禱佛教や講論佛教が何ほどの價値があらう。まことに保元平治の亂は平安佛教に對して、最後の

とどめをさし、すでに時代は新しい佛教を渴望してゐた。そしてこの渴望に應へたものが専修念佛である。いかなる無學の庶民にも解りやすく信じやすいやうに、直截簡明に、専修念佛の義が京都の一隅で唱道せられた。貴族も庶民も、ことごとく之に赴き、僧俗ともにこれに歸したことは云ふまでもない。時代は法然をむかへ、法然は時代を導いて、こゝに思想界の中心人物となつた。そしてこの法然も嘗つて藏俊の講義をきいたこともあつたといはれる。

思ふに、こゝにいふ歴史的な推移が藏俊の心眼に映らぬやうなはずはない。戦亂の慌しい馬蹄のひゞきは僧房の深窓にもきこえてきた。京の一隅に唱道された一向専修の念佛は、燎原の火のやうに、夥しい共鳴者をかちえたのである。彼をきゝ此をながめた藏俊の念頭を去らなかつたことは、甚しく衰微したわが宗を如何にして復興するかといふことであつた。前に空晴門下には一時に名僧學僧が輩出して、漸く唯識宗も衰微の域を脱したかに見られたが、これもやがて餘り振はなくなつた。いまや攝關の子弟をむかへて虚勢をはり、僧位も僧綱も族姓の尊卑によつて左右された。僧正僧都はさながら僧衣をまとう貴族であつた。どうしてこゝに出世間の根本義が見出

されよう。

菩提心の麻痺した法師達には紫衣や牛車はあこがれの的であつた。しかしながら永劫に生きようとする者に、現世の虚榮が何ほどのものであらう。どうかして一宗を永遠に傳へたいと願ふものに、かりそめの學藝やうき足たつた生活は微塵の價値もなかつた。このやうなわけで藏俊は夜を日について専ら講學に精進したのである。大疏抄第四十一の奥書には、自去年正月一日、於春日御社、始讀疏上卷、至今年 月 日訖三卷功了と記し、また仁平二年四月六日夜戌刻抄了といふ。これによると、大疏抄、一部四十一卷はおよそ一年三ヶ月で制作されたことになる。藏俊がいかに精力絶倫の人であつたか知られると共に、またいかに教學復興のために精魂を傾けたるか充分に推測されよう。

およそ教學はならひ學ぶべきである。もとより教は理を離れて存在しないが、さりとて理そのものが教であるとはいへない。教は理によつてたつと共に、理は教によつて顯れるのである。故に教に對する學は學のための學ではない。學は眞理を愛する學的精神を根本とするといふが、しかしこれは唯一絶對のものであるまい。教をならひ、教に遵奉するところにも學はある。東洋で學とい

ふのは、むしろこの教を信順するといふ學である。學問するといふは聖教のまゝに行ずることを學ぶのである。こゝに教學の眞面目が發揮されるとすれば、かの本文抄、大疏抄などにおいて、必要な教文を引きながら私見を加へぬことには甚深な意味がある。藏俊はこの方法によつて眞實の教學をたてようとしたのである。

唯識宗はわが國に傳來してから、すでに四百餘年の歲月を經過した。この間に幾多の高僧碩學があらはれて教學は盛大となつたこともあるが、しかし教學が盛大となれば、それだけまた解釋も多岐にわたり異説もいろいろ起るのである。そこで正しい教學をたてるために、その色々の解釋を研究するといふより、むしろその解釋が生ずべき根本の經文、論文、疏文などを直接に研究せねばならない。ことに唯識宗の如き、洪濶な思想體系を有しかつ三國にわたる永い歴史が存するときは、なほさらである。この點、本文抄には歴史的にも重要な意味があると考へられる。明かに本文抄には復古主義の傾向が見られるが、しかもこの本文抄はやがて尋思抄、同學抄が成立する基礎となる點において、さらにその重要性を増すのである。たゞしこれらことに就ては別に記されるであらう。

それではこの本文抄などは、前の平安初期または平安中期の著作に比して、いかに相違するであらうか。まづ平安初期においては、別記の如く、玄奘門下に數派ある中、日本の唯識宗はいづれの系統をうけるべきか、これを決定することが重要な課題であつた。故にこの時代の學者は日本の唯識宗が玄奘慈恩の系統をうけることを證するため、慈恩ことに淄州の著作を研究するのに、その主力を注いだのである。然るに平安末期の本文抄には少しもこの傾向は見へない。唯識宗が慈恩淄州の系統をうけることは、もはや既成の事實であつて今更こゝに問題とならなかつたが、さりとて他の學者の説が全く参照されぬと云ふのではない。西明・道證・玄範・神昉・環興など支那、新羅にわたり、諸の學者の説は充分に参照されるのである。この點、前の平安初期と殆んど變るところはない。

次に平安中期の著作に比較するに、中期の著作はいかにもその規模、構想が小さいのである。その解釋の仕方鮮かであり、また巧みであるが、全體的な規模が小さいのである。これに對して本文抄は全體の構想が雄大である。個々の解釋については明瞭な決擇をあたへず、あくまで唯識論の全體の體系を追究して、これを纏めあげ

ようとす。この點、著者の企圖するところが全く相違するのである。本文抄、大疏抄などの他に、藏俊には菩提院抄がある。これは唯識論、第六卷の一部分についてその論義を抄録したものであつて、いまは同學抄の中に編入されるのである。そしてこの書は本文抄といふより同學抄などに近いもので、この點、同學抄の先驅をなすとみられる。四卷一部をなし、久安三年の作といふから(同抄奥書)、これは藏俊、四十四のときである。

次に仁平二年に因明大疏抄が完成したことはすでに前記の如くであるが、これは藏俊、四十九にあたる。また唯識論には因明の學識がないときは、了解に困難なところがある。これも前に一言した通りであるが、この唯識論において特に因明の方面から研究すべき點について、上(六章)下(九章)二巻をもつて解説した書が唯量抄である。この書は唯識比量抄と共に、藏俊が左大臣頼長のもとに應じて作り、すでにその草案を完成してゐたのであるが、いまだ清書をおはらぬ間に頼長の薨去あり(保元の亂)、ために賢覽にそなへることができず、甚だ遺憾であつた旨を唯識比量抄の識語に記すのである。この抄は二巻あり、唯識宗において殊に重んぜられる唯識比量について委細に解明するのである。それ故にこの唯識比量

については前の唯量抄の中には、何にも説かれてゐないが、およそこの兩抄は保元元年の作であるから、藏俊五十三のときである。なほ頼長は因明をよくし因明左府抄の著あり、また聖德太子の崇拜者であつた。

次に藏俊には法華玄贊文集の著がある。これは近年、金澤文庫より卷八十八、卷九十などが見出され、その奥書には應保二年の年號が存するから、これは藏俊五十九のときにあたるのである。さらに藏俊の著として注進法相章疏一卷がある(安元二年)。これは世に藏俊録といはれ、前の永超録と共に古經録として重んぜられる。このやうに藏俊により唯識教學が漸く復興の氣運にむかつたことは否定されない。故に別當次第にも藏俊をたゞえて修學の面目、まことに古今に絶すと稱するのである。弟子に覺憲あり。

貞 慶

藤原貞憲の子、貞憲は鳥羽、崇徳、近衛の三帝に歴事して後白河上皇を輔佐し、保元の亂後、朝儀の復興、莊園の整理、内裏の造營などに非凡の手腕をふるひ、また博學多才をもつて世に知られたが、後に藤原信賴と相剋を生じ、ついに平治の亂を起した通憲の子である。通憲

には貞憲の他に、貞慶の師となつた覺憲を初め、山門の龍象として名譽の能説であつた澄憲、法然上人の弟子となつた遊蓮房圓照(是憲)、三論の碩學であつて後に高野に隱棲した明遍などあり、これらは何れも貞慶の叔父にあたるのである。また貞慶の兄弟も四人まで出家した。兄を貞雅、貞覺、實玄といひ、弟を貞敏と名づけ、何れも圍城寺、延曆寺、東大寺などにおいて已講以上になつたのである。このやうに貞慶は佛縁淺からざる家に生れたのである。

貞慶は八歳にして覺憲の門にいり二明の教を學び、文治二年に講師をつとめたが(三十二)、その學識には餘ほど深いものがあつた。ことに貞慶は勇猛精進の人であつて解脱上人修學記には之を次のやうに傳へる。日月移り易く晝夜徒なし。名利すて難くとも修學は何ぞ怠らん。今生また幾ふにあらざれば、争か三塗の苦域をはなれん。もし三寶の冥助にあらざれば、争か三塗の苦域をはなれん。且つは行となり法となり且つは孝となり身となる。よろしく修學を嗜みて不用を止むべしといひ、また晝夜六時を空しくすべからずとなし、一日の日課を定めて、午前零時より四時まで休息睡眠、四時より八時まで學問、また八時より正午まで學問、正午に勤行、午後二時より四時まで

學問、四時より六時まで外典世事、六時より八時まで修行念誦、八時より十二時まで再び學問と記すのである。してみると一日の中、十四時間を學問に費したことになる、いかに研究講學に没頭したか、充分に知ることができらう。

こういふわけで貞慶は當時、屈指の佛教學者になつたこと無論であるが、しかしこの學問は單なる學問ではなかつた。解學即行學の學である。佛敎において信をはなれた學はない。學することは信をみがき鍛へることに他ならぬ。學問は人間修行である。觀心である。これに就て貞慶には左の逸話が傳へられる。あるとき貞慶は壺坂の僧正(覺憲)のもとに湯治におもむき、入浴の刻限をまつてゐたが、隣室には數人の學僧が集つて、盛んに宗義について甲論乙駁してゐたところ、たまたま貞慶が隣にあることを知つて、その批判を求めたのである。然るに貞慶は黙して答へず、

いにしへはふみ見しかども白雪の

ふかき道にはあともおほえず

とうたつたといふ(古今著聞集)。議論のための議論は修行のさまたげとなる。概念の遊戲に陥つてはならない。

貞慶はこれを嚴に警戒したのである。

そして佛道修行を妨げるものは、たゞに議論のための議論ばかりではない。俗務、酒宴、雜談、博奕、姪事など、すべて修學の障害となるであらう。このやうに修學記にはいましめられる。それだけではなく名を欣ひ利を求めるのが人間の常である。たま／＼小善をはげむやうであつても、多くは惡縁のために破られ、少しは罪障を悲しむことがあつても、かへつて恩愛のために忘れるのである。無益のことには喧しく、しかも出世間のことを談じようとしない。他人の短を斥すのは甚だ嚴重であるが、自分の過を省るのは頗る寛大である。人間の眼を慎むことは知つてゐるが、神明の照覽したまふことを全くわすれ、まれに一善をつとめることがあつても、多くは名聞の思ひにけがされるのである。いかにも沈々の凡夫である。空しく苦海に漂溺するより、急いで彼岸を求めなければならぬ。

それに風葉の身は保ちがたく、草露の命は消えやすい。今日は南隣に哭し、人を送る涙もいまだ盡きぬうちに、明日はまた北里に哭し、いかに骨を埋める土は乾くひまもないのである。極寒の半月は荒原の骸のうへにひとり影をとゞめ、連峯の曉風は墓側の松のあひだにかすかに哀を奏する。傷しいかな、親しく語りあつた芝蘭の友

も、命をはれば遠くおくり、堅く契りかはした斷金の交も、魂がなくなれば獨り悲しむにすぎない。一生はすぎ易いのである。人はゆき我はのこる。果してこれは夢であるのか、夢でないのか。まことに無常迅速である。速かに愛悲の妄海をはなれ、正しく常樂の法域に入らねばならぬ。耿々たる燈火にも影がさす。この影も迷ひをあらはすすがとならう。飄々たる松風の聲をきく。この風の聲も心を觀ずるもととならう。心の外に法があると執着するから、ながく生死に流轉するが、ただ一心のみがあると悟れば、頓に生死を離れるのである。深廣なる佛道を進むことこそ至要である。

然るに學文の志はあつても、空しく無上の法寶を費して、かへて名利の價をつのり、また甘露の妙藥をなめて、いよ／＼煩惱の病をおもくするのである。佛法を學問するものであつて、或は憍慢となり、或は嫉妬をおこし、或は嘲弄し、或ひは誹謗するやうなものがあるではないか。このやうなものには、すでに一善もなく妄染は最もふかい。しかるに猥りに比丘と號し、佛子と稱する。宛もそれは蝙蝠に似るのである。たゞし菩薩が我を念じ、我をあはれみたまふことを骨髓に徹して憶念せよ。つねに利益しようとははれみたまふことは一子の如し。詳か

に二利の要義をおもひ、直ちに一念の道心を起さなければならぬ(愚迷發心集による)。

このやうに深固の菩提心をおこした貞慶は、勿々たる奈良をはなれて、ほど遠からぬ笠置山に立てこもつた。

この入山の動機については異説がある。まづ元亨釋書によれば、清貧の上人は宮中の最勝講に召されたとき、粗衣をまとひ乗物もなく出席して遅參されたが、先着の官僚や僧職たちはこれを見て冷笑を浴せかけた。華美な法衣は釋尊の規矩に反する。如法の法衣を嘲笑する彼らの心事に痛憤された上人は、講をおへるや、興福寺にかへらず、にはかに笠置山に隱棲せられた。時に壽永二年、二十九であつたといふ。東國高僧傳、本朝高僧傳、招提千載記なども亦これに變らないが、しかし玉葉、解脱上人形狀記(興福寺藏)、上人御房御事(法隆寺藏)などにはこれを記さず、また、隱棲の年も建久三年とするのである。いまは暫らく後説による。

たゞしこゝに隱棲とはいふけれども、それは決して消極的な隱退ではなかつた。釋尊の在世にもれた悲しみ、それは悲中の悲である。五濁惡世の邊土に生れ、僅かにきく慈父の遺誡の他に、この生死の苦海をわたる道はない。それに自宗の現狀を顧るとき、果してどうか。たと

へ藏俊、覺憲のやうに、一世の師表となるべき高僧學僧もないではないが、しかしこれも曉の星のやうに稀であつた。紫衣にあこがれ宮講を無上の光榮として、學間につとめるものは未だ上品の部類に屬する。さらに下品に至つては、柿衣をまとひ刀杖をたづさへて、曇頭の僧兵となつてゐるではないか。殺生は重罪に相違ないが、しかしこの惡逆を行しても、敢へて制止するものもなかつた。大鏡には、かの御寺(興福寺)いかめしく、やむごとなき所なり、いみじき非道の事も山階寺にかゝりぬれば又ともかくも人もいはず、山階道理とつけておきつといふが、しかもこの山階道理を強いてたてる背景には、僧兵の暴力があつたことは否定されない。まことに寺門は兵營と化してゐたが、しかしこの僧堂から正しい教學がおこるといふやうなことは全く期待されない。まして深固の大菩提心をや。

こういふわけで、すでに貞慶以前にも、奈良に訣別した隱遁者もあつたし、また衰へた教學を復興するため、奈良にあつて渾身の努力をはらつた人もないではなかつた。貞慶はこの兩者の長所をとつて笠置山に立てこもつたのである。とほく奈良を離れたならば、聖教を繙いて研究するには多大の不便があるのみではなく、さすらひ

の旅路では殆んど不可能である。たゞし墮落のどん底に陥つた奈良にあつて、教學を復興し正法を護持するといふことなど、それは殆んど癡人の夢にひとしい。これがためには何としても、俗累をはなれ山中に籠らねばならなかつた。貞慶が特に笠置山に隱棲し、はるかに釋尊在世のいにしへを追懷しながら、正法の復興に畢世の努力を傾けられたことについては、右のやうな事情があつたであらう。たゞし貞慶が正法護持の復古主義をつたことには、新興の淨土教などの影響があつたことも看過されない。

時は末法、機は下根である。聖道の諸教は行證ひさしく廢れ、いまや自力の難行にたえるものは一人もないではないか。道俗時衆よ。共に同じくこの教を信ぜよ。そしてこの教とは一向專念の念佛である。釋尊がこの世に出現せられた本懷も、やはり極惡最下のものゝために彌陀教をとくにある。まことに往生之業念佛爲本である。

このやうな法然上人の念佛は浸々として南都にも流れてきた。建久元年といへば貞慶が笠置山に隱棲した三年前であるが、このとき法然上人は重源の請により、東大寺において淨土の三部經を講ぜられたのである。

まづその大經釋をみると、法相の觀門をあげ、五重唯

識、三性三無性の觀はあるが、しかしかの百歳のとき所依の經論はみな悉く滅盡す。そのとき衆生は何によつてか之を修せん……況や末法萬年の時の人をや。然るに特に此(無量壽)經のみ留るが故に、かの時の衆生はこの經に依憑して、たゞよく念佛すれば、みな往生することを得といふ(漢語燈一)。

また觀經釋には、華嚴、天台、眞言、禪門、三論、法相の諸師、各々淨土の章疏を作れり。何ぞ彼らの師によらずして、たゞ善導一師のみ用ふるやと問ひ、これに答へて、彼らの諸師も淨土の章疏を造るといへども、淨土をもつて宗となさず。ただ聖道のみをもつて宗となす。この故に彼らの諸師によらずといふ(漢語燈二)。

また小經釋には、彌勒菩薩は世親の請に應じて都率天より中印度に降つて瑜伽を演説したまふ法相宗の祖である。玄奘、慈恩にあふことを得ずといへども、もし五分十支五位百法の法門を學せんと欲せば、まさに發願して極樂に往生すべしと勸められる(漢語燈三)。

法然上人は東大寺において、法相を初め南都諸宗の人々を前にして、敢てこのやうな講義をされたのである。

貞慶はこの講筵に列してゐたか、どうか解らないが、しかし鋭敏な貞慶の心眼に、この日本佛敎の新しい展開が

うつらぬやうなはずはない。貞慶の隱棲は建久三年とすれば、宛もこの講義があつて三年目である。或ひはこれが隱棲の直接動機とならなかつたとしても、しかし全く無關係とみることもできない。そしてこの淨土敎が貞慶など唯識宗の人々にどのやうな影響を與へたか、それはやがて現實となつて表はれるであらう。

鎌倉初頭の佛敎界にたち、一方には救ふことができないうほど衰へた自宗の現状をながめ、また一方には澎湃として弘まる専修念佛の勃興に刺戟せられ、正法の復興に全生命を打こまれた解脱上人の胸底には、とうてい第三者には測り知られぬほど深刻なものがあつたであらう。そしてこの正法を復興するには、まづ現在を釋尊在世のいにしへに還らしめ、舍利弗、目連などの教團を再現せねばならぬ。かくて笠置にももられた上人は建久五年に般若臺院をたて、六角堂の上棟を行はれた。同七年には般若院に春日明神を勸請し、翌正治元年には伊勢にまうで日課として釋迦念佛五萬遍を起請されたのであるが、間もなく春日の神告によつて一萬遍に減じ、他の時間は専ら學問にあてられたといふ(春日御流記)。このやうにして笠置の僧堂は開設されたのであるが、こゝで嚴格な戒律が遵奉されたことは云ふまでもない。

戒律は佛法の大地である。釋尊の遺弟ならば一歩たりともこの大地を離れることはできぬ。然るに平安時代の浮華な風潮は、この窮屈な大地をはなれ奔放に飛翔しようとするものを生じた。南都の戒律は殆ど傳統を失ひ、徒らに戒壇には塵が積るのみであつた。知名の僧都でき

へ姪肉の禁をおかし、せぬ佛はもとより、かくす上人も少なかつたのである。平安末期、中ノ川の實範が律宗の復興をはかつたとき、漸く唐招提寺の一殘僧によつて四分戒本をうけたといふ。もつてその衰微がいかに甚しかつたか知ることができよう。このやうに正法の復興には戒律の復興がともなひ、また復古主義には嚴肅な道義心が要請されたことは注目に價する。

そして解脱上人が笠置の般若院において、教學の復興に努力されてゐたとき、また京都の栴尾において同じく復古主義のもとに、嚴肅な僧堂生活を營む人があつた。

これ即ち明恵上人高辨である。「如來の在世に生れ遭はざるほど、口惜しきことは候はざるなり。我も人も在世、もしは諸聖の弟子、迦葉、舍利弗、目連等のいませし世に生れたらましかば、隨分に生死の苦種を枯し、佛道の妙因を植て、人界に生れたる思出とし候べきに、如來入滅の後、諸聖の弟子もみな失せたまへる世の中に生れて

佛法の中において一の位を得たることもなくて、徒らに生じ、徒らに死するほど悲しきこと候はず」と上人は歎じ、この悲しみは全く解脱上人のそれに變らない。末法の現在を正法のいにしへに還らしめ、何とかして釋尊の教團を再建しようとされたのである。

このやうに正法の時機を理想としてたつた人には、未來の安樂よりも現實の實踐が重要な課題であつた。因果應報は必然の理である。念々の薰習は朽ちることもなければ、また失はれることもない。時々刻々、慎しむべきは思ふこと語ること行ふことでなければならぬ。明恵上人が「我は後世たすからんといふ者にあらず。ただ現世にあるべきやうにあらんといふものなり」との言は、この自力主義を端的に表明して餘蘊はない。復古主義者は深固の大菩提心をおこして勇敢に精進し、菩薩の苦行をなすの苦もなく造作もなく實踐した。この生活態度は淨土教者のそれと全く對照的である。

それでは解脱上人は笠置山に隱棲してから、何を初められたかといふに、まづ唯識教學の復興にその主力を注がれたること無論であるが、なほそれと共に戒律の復興、釋迦念佛の修行、聖德太子信仰の普及などにも盡力されたのである。

前記の如く、中ノ川實範が四分戒本の傳授をうけた人は、唐招提寺の一殘僧であつたといひ、當時、この寺の頽廢はかなり悲惨であつたやうである。思ふにこの廢墟と化した状態は上人の時代にもあまり變つてゐなかつたであらう。それほどに戒律は衰へてゐたのであるが、上人はこれを復興するために、まづ唐招提寺におもむき、その東室を修理された。これは建仁元年であるが、實に現存する同寺の東室は鎌倉様式の佛堂であつて、そゞろに當時の面影を傳へるのである。翌建仁二年、上人はこの寺において釋迦念佛會を初め、また梵網經を講ぜられたともいふが、思ふに熱烈な信仰に生きる清僧によつて指導された念佛會が、いかに嚴肅の氣に盈ちてゐたことか想像に餘りがある。また上人は戒律復興のために、建曆二年、興福寺のうちに常喜院をたて、律の學僧二十口をおかれたといふが、これは建仁二年より十年後であり、上人入滅の前年にあたる。このやうに南都の戒律は復興せられ、やがて良遍、覺盛、叡尊などによつて盛大となり、さらに圓照、凝然などに及ぶのである。

次に釋迦念佛について一言すれば、これは彌陀念佛に對する。京都を中心とする彌陀念佛は次第にその勢力を擴張して、ついにその共鳴者を奈良の地方に獲得するや

うになつた。こゝに南都佛教は重大な驚畏と危機にさらされたのである。そうでなくても、教學は衰頽し教團は墮落して、すでに南都佛教は自壞作用をおこしてゐたが、こゝに日本佛教の新しい展開によつて、さらに崩壞の速度を加へたのである。このときにあたり彌陀念佛に對する意向をもつて、唱道されたものが釋迦念佛であつた。末法五濁のときに正法を實現し、釋尊の教團を再建しようとする人には、その信仰の中心が釋尊にあるべきことは自明の理である。興福寺の奏狀に念佛の九失をかぞへる中、その三に釋尊を輕ずる失をあげるは之による。このやうに解脱上人は笠置山、招提寺などの他に、さらに法隆寺においても釋迦念佛を初められ(元久元年)、もつて南都教團の動搖を防がうとせられたが、しかもこの念佛者の往生すべき淨土は兜率淨土であつた。

すでに大聖は涅槃の雲にかくれたまふ。光顔を拜せんと欲しても、また拜するに由なし。末法の遺弟は、大聖がわれらを付屬したまへる當來導師の彌勒佛を憶念せよ。このやうにして兜率上生の思想は生ずるのである。上人はその著、心要抄に、この兜率淨土の願生をすゝめられる。正像の二時はをはつたけれど、如來の遺弟よ、徒らに慨くことなかれ、如來は持戒破戒、有戒無戒をと

はず、みな彌勒に付屬して、龍華三會の曉には悉く解脱をえしめたまふ。三會の會座はなほ遠いとしても、當來導師はいま現に兜率天にましまし、われ等をひとしく啓念せらる。この當來佛をおいて他に歸すべき佛菩薩はさらない。それ故に無著、世親、戒賢などみな兜率に上生し、玄奘また爾り。慈恩に至ては特に瑞應を感じて上生經疏を作り、さらに玄奘門下においても上生を願求した人々は少くない。またわが國でも明詮・眞興・覺英・恩覺など内院の上生を願じた人は多數にある。

無着以來およそ一千餘年、三國に風を傳へて當代に至つたのである。どうして父母の膝下をはなれ、忽ちに主君の恩恵を望むやうなことができよう。上生經は天宮建立の因果と衆生上生の因果をとく。知足天宮は同じく此界(欲界)にある。よろしく附屬の遺弟は彌勒に歸し、その依正を觀すべきである。もし根機が拙くして觀ずることができなければ、その名號を稱へるがよい。然らば一千二百劫の生死の罪は便ち除かれるであらう。知足の天宮には具縛の凡夫も入り易いのである。彌陀の報土は遠く三界の外にある。女人、根缺、二乘種は生ずることができぬ。願も行もかけた凡夫は徒らに自己を揣らず、妄りに西方に往生しようと願はぬがよい。このやうに上人は

彌陀念佛をすて、彌勒念佛をとられたのである。七大寺巡禮記によれば、該(般若)院において毎年九月に三晝夜を期し、彌勒の不斷念佛を修し行道をおこなふが、これもまた上人の遺風を傳へるものと云ふのである。

それではこの念佛は口稱か觀念かといふに、口稱よりも觀念を重んずるやうである。上人の「唯心念佛」によれば、三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別の經文によつて念佛が解明される。それではこの經文が如何にして念佛となるかといふに、これを三にわけて明すのである。

その一は能所對。佛は能化であつて大悲をもつて救ひたまひ、衆生は所化、信心をもつて念佛するのである。もし二鏡が相對して互照すれば、照す鏡と、照される鏡(本質)と、そして寫し出された相(影像)とは互に展轉、反映して、こゝに眞の念佛が實現される。

その二は因果對。いまは三界の中にあつて、正しく衆生であるが、しかし漸く善根を修習すれば、この佛徳の種子は一心、即ち第八識に熏ぜられる。今因は當果をはなれず、當果もまた今因をはなれない。凡位も佛位も一念の心をはなれず、實に因果の二位は不即不離であるから、それ故に心佛及衆生、是三無差別であつて、これが

眞の念佛であるといふ。

その三は眞俗對。一念の心は相において妄であり、これ即ち衆生であるが、性においては眞であり、これ即ち佛である。佛性は即ち如來藏であるが、してみると今心の本性が、これ即ち佛である。例へば氷と水の如し。俗においては氷であるが、眞にあつては水となる。氷水不二、眞妄不離であつて、釋尊の三身もわが佛性に離れず、こゝに眞の念佛があるといふ。そしてこれが法然上人の念佛に異なることは、一枚起請文をみれば明かに知られるのである。

このやうに一方には釋迦念佛が復活し、一方には彌陀念佛が勃興したから、こゝに兩者の拮抗角逐が生ずることも止むをえない。それに法然門下において聖道の諸宗を排斥し、餘の佛菩薩を誘ふものが生じたばかりではなく、さらに惡を恐れるのは、本願を疑ふからであるといひ、敢て戒行を破るといふ造惡無礙の徒輩まであらはれるやうになつた。この點、法然上人も慎重に對策を考慮されてゐたに相違ないが、極端に陥り易きものが生ずることは何時の時代においても變りはなく、これを制止することはなかなか容易ではなかつた。そこでこれを非難攻撃したのが叡山の僧徒であつて、よろしく専修念佛を

停止すべき旨を座主のもとに申請した。座主はこれを法然上人に詰問したので、上人は門下を集めて七ヶ條の誓約をなさしめ、且つ一書を座主に送り、つとめて辯明されたために、山門の動搖も漸く平靜に復したのである。この誓約が有名な七ヶ條の起請文である。

然るに法然門下の亂行はなかなか終熄すべくもなかつた。それだけでなく種々の流言が亂れとぶやうになり、次には興福寺の大衆が蜂起して藤氏長者の第にせまり、速かに念佛停止の勅裁を仰ぐように強訴した。この奏達狀には念佛の九失があげられる。

一 立新宗失 二 圖新像失

三 輕釋尊失 四 妨萬善失

五 背靈神失 六 暗淨土失

七 誤念佛失 八 損釋衆失

九 亂國土失

要するに念佛そのものは共許であつて、これを拒否するのではない。また觀勝稱劣といつても全く口稱を廢棄するでもない。たゞその排斥するところは、口稱の一行をたてゝ萬善を廢するところにある。萬行を認めなくては何としても自力教は成立しないからである。奏達狀は、早く奏聞をへて七道諸國に仰せられ、一向専修の條

々過失を停止せられ、かねてまた罪科を源空、並びに弟子等に行へば、ながく破法の邪執をとどめ、還つて念佛の眞道を知らんと結ぶのである。この奏達狀は解脫上人によつて元久二年に起草されたといふが、洵にこれと後に明恵上人が選擇集を破するために著はされた摧邪輪及莊嚴記とは新興の淨土教に對する反對者の代表的な見解とみられる。その後さらに興福寺から強訴があり、建永二年、ついに朝廷より念佛停止の宣旨が下されたのであるが、しかし時代の推移は如何とすることもできず、いよく専修念佛は隆昌となるのである。

次に太子信仰の鼓吹について記すならば、上人の著作には特に太子を讃仰された文はないやうであるが、しかし上人は元久元年に上宮王院(舍利殿)において釋迦念佛會を營まれたといふ(法隆寺別當記)。およそ鎌倉時代は太子信仰が最も盛んとなつた時代である(別記参照)。現に法隆寺に存する國寶建造物の中にも、鎌倉時代に修理または新建されたものが數棟あり、各時代を通じて數に於いて最も多いのである。これに由ても鎌倉時代にいかん太子信仰が盛んであつたか充分に知られるが、しかもこの太子信仰の鼓吹といふことについて、やはり解脫上人が深い關係にあつたと見られる。法隆寺夢殿の北側に

は舍利殿繪殿が建てられてゐる。これはまた持佛堂ともいひ、鎌倉建築の代表的なものであるが、昭和の解體修理のとき、創建當時のものと思われる棟木銘が発見せられ、その中に建保七年の年號が見られるのである。この棟木銘には上人の名は見出されぬが、しかし建保七年は前に上人が法隆寺において觀音寶號を修せられたといふ建曆二年より七年の後である。してみると舍利殿繪殿の建立に上人は直接關係されなかつたとしても、太子信仰の鼓吹に與つて力があつたことは否定されない。上人の弟子、覺遍は法隆寺別當となつて寺門の復興につとめ、また弟子の璋圓は法隆寺にあつて太子の三經を講讀し、また顯眞があつて太子の讃仰につとめたので、大いに太子信仰は盛んとなつたのである。

承元二年、上人は笠置山をいで、程とほからぬ海住山寺に移り、この寺を再興せられた(五十四)。そしてこの前年、承元元年には念佛が停止せられ、法然上人は土佐に、親鸞上人は越後に流罪となり、また死罪となるものもあつた。解脫上人、起草の興福寺奏狀を提出して一山の大家が強訴したのは、法然上人流罪の前々年である。たとひ護法のためとはいへ、一たび解脫上人が思ひを死罪流罪にあつた人々に馳せられたとき、いかに斷腸の思

ひであつたであらう。解脱上人の心境に重大な變化が起ることも免れがたい。それに死罪は極刑であるにしても、しかしこれも肉體的な生命を斷つにすぎない。配所におもむくにあたり、なほ醇々と念佛の妙旨を説き來り説き去られる師匠、法然上人に對して、敢て弟子の西阿が諫めたとき、われ、たとひ死刑に行はるとも、このこと言はずばあるべからずと却けられた。この一言は如何なるものも、寸毫も犯すことはできぬ。

永遠な生命は時代と共にながれ、また時代を造るのである。權力や財力や武力でもつて、これを阻止することなど、宛も空手をもつて決河をさゝえようとすることに同じ。念佛が盛んとなるから、八宗が衰へるのではない。八宗が衰へたから念佛が興つたのである。思ふに解脱上人の炯眼には、この時代的動向が明かに認められてゐたに相違ない。それに自宗の現狀に思ひを致せば、すでに斜陽の觀を呈してゐるではないか。落日をながめる人はあはたゞしく暮れていく黄昏の哀調に、魂が嗚咽するのを感じるだらう。あれを思ひ、これを考へ、悲痛な感激を胸底に秘められた上人は、海住山寺に移住されたのであらう。因明の明要抄、明本抄はこの寺において著はされたが、明要抄の奥書には、老眼病力、不堪日記、乃詠

(良)算公、綴其新舊、聊加復審とある。これは入滅の前年で、このときすでに上人は不治の病床にあられたのである。洵に衰へいく教法のために不惜身命の努力を臨終まで續けられた上人の一生は悲壯である。

建曆三年二月三日、上人はいよ／＼臨終の迫れることを知られた。憔悴した病軀では殆んど起きあがる氣力もなかつた。それでも漸く抱きおこされ床上に端坐せられた上人は、はるかに西南方に向つて恭しく合掌された。

海住山寺より西南方といへば、それは奈良の方向にあたるのである。必ずや上人はなき後の令法久住を至心に春日明神に祈願されたに相違ない。臨終の一念にはるかに三會の暁を期し、兜率の内院に上生せられた。時に春秋五十九。してみると上人は一一五四—一二一三の人で、師の覺憲より二十四の年少である。弟子に覺遍、良算、圓玄、璋圓、興經、戒如、覺眞などあり、また笠置山と海住山寺(分骨)に上人の墓がある。師蠻、賛して云く、世に名をよばず、解脱上人と號するは、千載不磨の口碑なり。高潔の儀表を遠想せしむ。こゝを以て春日の明神はしば／＼般若臺に影現し、法を問ひ戒を受けたり。誠に神人に協ふの徳なり。

なほ解脱上人の唯識教學の復興については別に記したことがあるから、今はこれを略する。